

論文の和文要旨	
題目	定形性の観点から見た現代朝鮮語の副詞節
氏名	黒島 規史

現代朝鮮語（以下、朝鮮語と称する）は主に副詞的な修飾機能を担う用言の屈折形を多く有している。本研究ではそのような屈折形を副動詞と呼ぶ。朝鮮語の副動詞に関する先行研究では、それぞれの副動詞の意味や統語的特徴が詳細に記述されており、研究の蓄積も多い。しかし、これまでの先行研究では各副動詞間の関係を描こうとする研究は少なかった。また、朝鮮語の副動詞に関わるいくつかの問題、(i) 副動詞接辞と結合する用言の特徴、(ii) 副動詞に焦点助詞が後接したときの統語、意味、(iii) 副動詞がテンス、アスペクト、ムード (TAM) マーカーと結合したときの文法的な制約、(iv) 副詞節の主節用法についてはこれまでまとまった研究がなかった。これらの問題は朝鮮語の特徴である連辞性をよく反映しており、研究が進めば、類型論的研究にも貢献するところが大きいと考えられる。本研究の目的は上記 (i) から (iv) の問題を定形性 (finiteness) の観点から明らかにし、各副動詞間の関係を示すことにある。本研究では副詞節の定形性は節の述語にマークされる文法的要素の多寡によって決まると定義した。本研究の対象は朝鮮語でレジスターの別なく頻繁に用いられる、-key [様態, 目的], -myense [同時, 契機, 逆接], -taka [中断], -teni [契機], -(a/e)se [継起, 時間, 原因], -ko [継起], -nikka [契機, 理由], -myen [条件], -(a/e)to [譲歩], -nuntye/-ntey [逆接], -ciman [逆接] の 11 個の副動詞である。主な調査はコーパスから用例を収集し、分析する手法を取った。結論として本研究では、定形性の度合いが高い副詞節は結合する述語の品詞（動詞, 形容詞, 指定詞 (コピュラ)）や TAM マーカーに制限がなく、副詞節の意味がほとんど変化なく主節としても現れることができる一方、焦点助詞との結合には制限が強いことを明らかにする。定形性の度合いが低い副詞節はまたこの反対の特徴を示す。本稿は全 7 章から成る。序論である第 1 章と結論である第 7 章を除いた第 2 章から第 6 章は、それぞれの考察対象の従属度に従って配置される。つまり最も従属度の高い、副動詞形が複合動詞の V1 になる場合から、最も従属度の低い、副詞節の主節用法まで順に並べ、朝鮮語の副動詞の多様なあり方が概観できるようにしたということである。

朝鮮語の副動詞形は、文法化し本来の副詞的修飾機能を担わなくなったり、または語彙化し副詞や接続副詞となることがある。第 2 章では副動詞形と他の文法要素との連続性を概観すると同時に、本研究の対象を限定した。副動詞形との連続性は、具体的には複合動詞の V1, 補助動詞の V1, 助詞（複合格助詞含む）、補文マーカー、副詞（接続副詞含む）において見られる。本研究では副動詞形が文法化したり語彙化した例は対象から除外したが、本章は、

第6章で扱う副詞節の主節用法のような従属度の低い用法まで広がる朝鮮語の副動詞の連続性を考えるうえで、欠かせない観点を提供してくれる。

朝鮮語の副動詞接辞は動詞だけでなく形容詞や指定詞とも結合することができる。第3章では副動詞とどのような用言が結合可能かということ詳しく調査した。そして、本研究では副詞節の定形性と結合可能な述語の間には相関関係があることを明らかにした。つまり、定形性の度合いの低い副詞節は形容詞と指定詞との結合に制限が見られ、逆に定形性の度合いの高い副詞節は制限が見られないということである。本章ではさらに、副動詞が結合可能な用言の品詞にとどまらず、どのような性質を持つ用言と結合しやすいか、あるいは結合した際に副動詞の意味解釈に影響を及ぼすのは用言のどのような性質かということ論じた。結果的に本研究では、様態、目的を表す *-key* は動作性用言と結合するか状態性用言と結合するかによってその意味や統語的特徴が左右されること、同時を表す *-myense* と中断を表す *-taka* の意味は結合する動詞のアスペクト的特徴と関連すること、継起を表す *-ko* と *-(a/e)se* と結合しやすい動詞とその意味は動詞の他動性 (transitivity) と関連することを明らかにした。

朝鮮語は格関係以外の多様な意味を表す助詞を数多く有しており、本研究ではそのような一連の助詞を焦点助詞と呼ぶ。朝鮮語の焦点助詞には例えば *=nun/=un* 「～は」や添加を表す *=to* 「～も」などがある。第4章では副動詞と焦点助詞の結合可否を調査したうえで、「副動詞 + 焦点助詞」の意味や統語的特徴について記述した。先行研究においては母語話者の内省による結合可否を示すだけであったことが多いのに対し、本研究ではコーパス調査から単なる結合可否の提示にとどまらず、ある焦点助詞が結合するとき、用言はどのようなものが結合しやすいかということまで明らかにした。本研究では15個の焦点助詞を対象に定めた。そして、定形性の度合いの高い副詞節は焦点助詞との結合において制限が見られることを示した。また、継起的な意味を表す *-ko*, *-(a/e)se* は焦点助詞 *=nun/=un*, *=to* と結合することによって、条件、逆条件を表すことがあり、そのような例について意味、統語的特徴を記述したうえで、条件、逆条件を表す理由を考察した。本研究では副動詞が表す継起的な意味が、後続する事象に対して因果関係があると解釈されるときに条件的意味を表すようになることを明らかにした。そして、副動詞 (+焦点助詞) が表す継起、原因、事実条件、恒常条件、仮定条件という意味的な連続性を示した。また、「副動詞 + 焦点助詞」が条件、逆条件を表す場合、*=nun/=un*, *=to* はそれぞれ対照、極端という意味を表していることを論じた。

朝鮮語の副動詞はTAMマーカとも結合することができる。第5章では「副動詞 + TAM」の意味、統語的特徴、およびTAMマーカの意味的な制限などについて考察した。TAMマーカは進行アスペクトの *-ko iss-*、過去接辞の *-(a/e)ss-*、「～ようだ、～と思う」という意味を表す迂言的形式 [ADN kes kath-] (連体形 + 形式名詞 (こと、もの) + 同じだ)、蓋然性を表す *-keyss-* と推量を表す *-l kes=i-* (非現実連体形 + 形式名詞 (こと、もの) + コピュラ) を対象とした。まず、進行アスペクトの *-ko iss-* は定形性の度合いが低い時間関係を表す副

動詞以外とは比較的自由に結合することを示した。次に副動詞と結合したとき過去接辞の -(a/e)ss- は発話時を基準とした絶対テンス、主節時を基準とした相対テンスとして解釈されるかを考察した。そして、-(a/e)ss- は定形性の度合いが高い副詞節との結合においては絶対テンスを示すものとして、定形性の度合いが低い副詞節との結合においては相対テンスを示すものとして解釈されると結論付けた。最後にムードマーカの [ADN kes kath-] は結合しやすい副動詞はあるものの、副動詞との結合において、ムードマーカの意味に制限はないことがわかった。それに対して -keyss- と -l kes=i- はムードマーカ自体の意味と、ムードを認識する主体に制限が見られた。ムードマーカの意味に関して、-keyss- は四つ（意志、境遇、評価、判断）、-l kes=i- は二つ（推量、意志）に分類したところ、前者の場合、話者の境遇を表す意味には制限がないものの、それ以外の意味は副詞節の定形性によって制限が見られること、後者の場合、推量の意味に制限が見られることが明らかになった。ムードの認識主体に関しては、どちらのムードマーカとも、定形性の度合いの低い副詞節との結合において、1人称主体が制限を受け、2人称主体となりやすいことがわかった。その理由としては、定形性の度合いが低い副詞節の場合、主節の発語内効力 (illocutionary force) との相互作用によって副詞節のムードの認識主体が影響を受けるのではないかということ述べた。

朝鮮語の副詞節は、それ自体が主節として現れる場合がある。このような現象は ‘insubordination’ (Evans 2007) として知られている。第6章では副詞節の主節用法について、定形性に関わる形態的カテゴリであるテンスと丁寧さの観点から分類を行ったうえで、意味機能を詳しく記述した。丁寧さに関しては =yo が付加できるかどうかを基準にした。本研究では、副詞節として元々定形性の度合いが高い場合、あまり意味の変化なく主節として用いられ、過去接辞や丁寧さの =yo の付加も任意であることを示した。また、副詞節の主節用法の中には聞き手を非難する場面で用いられる用法があり、そのような場合 =yo が付加できない。本研究では非難を表す用法を感情モダリティ (emotive modality) として分類し、副詞節として元々定形性の高い節は、この感情モダリティを表しにくく、表したとしても生産性のない限られた用法しか持たないことを主張した。次に、終止形に直接副動詞接辞が付いた引用副詞節の主節用法、接続副詞の主節用法についても意味機能を記述した。最後に、主節化した節にさらに付加できる要素として mwe 「なに」や mal=i(-ta) 「～のだ」があることを指摘した。